

今日のみことば

□ 9月2日(日) ネヘミヤ 4章

城壁修理に人々は熱心であったが、敵の妨害もまた激しさを増した。これに対するネヘミヤの対応は、祈りと信仰に加えて実際的な行動であった。

□ 9月3日(月) ネヘミヤ 5章

ネヘミヤは裕福な人であったようで、様々な面で貧しい人々助けをしてきた。それに反して裕福なユダヤ人たちの法律違反に対しては断固とした態度を示した。

□ 9月4日(火) ネヘミヤ 6章

城壁修理に反対の人たちは、ネヘミヤ排除に躍起になり、恐喝や脅しをかけてきた。しかしネヘミヤの対応は鮮やかであった。城壁は二ヵ月後に無事修復完成された。

□ 9月5日(水) ネヘミヤ 7章

ここにはエルサレムに帰還した人たちの名前が挙げられている。このように神の民の歴史において、しばしばその名前が記されているのは、神の国の反映と関係があるのでは。

□ 9月6日(木) ネヘミヤ 8章

ネヘミヤは、国民の生活の基礎でもある聖書が一般に広く人々に読まれ、知られ、愛され、従わなければならないことを痛感しました。エズラが特設台の上に立って、聖書を朗読した。

□ 9月7日(金) ネヘミヤ 9章

民は悔改めた。その民の悔い改めは真実のものであった。過ちは是正され、人々は告白と礼拝ともって神に立ち返った。神はこの反逆の民を愛し、忠実に取り扱われた。

□ 9月8日(土) ネヘミヤ 10章

ここには律法厳守の誓約に印を押した者たちの名前が記されている。また誓約の義務の細則が述べられ、七つのことが規定されている。これは彼らの神に対する心からの契約でした。

ろ ぼ No. 1882
2018年 9月 2日
日本バプテスト 立川キリスト教会
牧師 大川 博之

私たちは、神さまからの祝福いっぱいの方にされたいと願っています。神さまの祝福をいただいていると感じるとき、それは神さまが共にいてくださるということを感じさせていただく時です。

ヨハネ 4:26
イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

サマリヤの女はその体験がありませんでした。神さまを礼拝すべき場所は、エルサレムの神殿だと信じていましたから、そのために彼女はエルサレムの宮詣を願っていました。しかしそれはかなわないことでした。なぜならサマリヤ人には、それは許されていないことでした。だれがそのようなことを決めたのですか。神さまの思いでなかったことは言うまでもありません。人間が勝手に自分たちの利益を優先させて決めたことでし

た。それでも私たちは心から神さまを礼拝したい。それは私たちの純粋なきもちです。すべてのものの主であるお方を、心から拝したい、このサマリヤの女のみならず、これは私たちの心からの願いだと私は思っています。

神さまを心から礼拝したい。神さまは私とともに、いつもいて下さるということを本当にいつも感じさせていただきたい。私は、サマリヤの女だけにとどまらないで、この私の願いでもあります。

イエスが、このサマリヤの女に「水を飲ませてください」と言われた言葉に始まるこの会話の中で、どのようにイエスを見上げさせていただくことが、大いなる私たちの喜びであるかを

聞かせていただくのです。イエスは、「水を飲ませてくださいと言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」と言われました。このイエスの言葉を聞かせていただきながら、今のこの私に神礼拝はどうであろうかということを考えさせていただいたことでした。

私は、形を大切にするという姿勢に乏しいのではと考えさせられています。私たちはすべてのことにおいて自由です。形、姿勢という、それは束縛であり、偶像礼拝につながるものだと言われるかもしれません。でも私は神さまを礼拝するとき、どうしても日本人の神社参拝での柏手を打つ本来の純粋なその姿勢を思い起こさせていただくのでした。

私たちプロテスタント教会が礼拝の大切なものとしているのは、説教です。私たちが神さまから託されたものは、「福音」宣教だと理解していますから当然のことです。御子イエスを賜った父なる神さまをまたしっかり礼拝させていただくことは、当然の私たちのありようだと理解しています。

私の理解のよるならカトリック教会が礼拝の中心として彼らが受け止めているのは「聖体拝領」であろうと思っています。いわゆる主の晩餐式に与るといふこと、礼拝を通してあの御子イエスと一体とされるという、これほどの喜びと光栄を見ることはほかにできるものではありません。パウロが「もはや我生くるにあらず。キリスト、わが内にありて生くるなり」と告白をいたしました。

聖書の学び・祈祷会

士師記11:29-46 ああ、わたしの娘よ

エフタはアモン人との戦いに出かけるとき、主に誓願を立てました。もしこの戦いで勝利を治めさせていただくなら、自分が帰ってくるのを最初に迎えた自分の家人を、主に全焼のいけにえとして捧げますと誓いました。

神さまはこの戦いに勝利を治めて凱旋しました。このエフタを、彼の一人娘が鼓を打ち鳴らし、踊りながら迎えに出てきました。エフタはその娘を見ると、衣を引き裂いて主の前で誓ったことを嘆き悲しみました。

聖書は私たちに、軽々しく誓うという行為をいさめています。また、確かに神さまは沈黙を決められているという不満もありますが、私たちはどのように神さまと対峙しているかということをしつかりとわきまえさせていただくことを、心に留めさせていただくことが出来たのは恵みではありませんか。



Read God's Word.

次週の聖書・説教

ヨハネ14:6-11

イエスは道です